コラム　当館職員の仕事

「恋が実った!!　第１号　豊島の旧宣教師館」の出典を探す！

当館職員の日々の仕事から、今回は調査・研究業務についての一例をご紹介します。

右の画像は 1983（昭和 58）年マンション建設計画から一転、当館の保存が決まった際の新聞記事です。「恋が実った！」の迫力ある見出しから、お客さんに保存の歴史を伝える際に頻繁に用いています。本記事は複写が当館の所蔵資料にあるほか、『雑司が谷旧宣教師館建物調査報告書』(1) でも掲載されています。しかし肝心の「どこの新聞社の記事なのか」は上部の社名が切れてしまっており、『報告書』のリストでも言及がないため不明となっています。そこで今回は保存運動を語るうえで欠かせない新聞記事の出典を明らかにしたいと思います。

昭和58年（1983年）6月4日（土曜日）

明治の洋館保存

恋が実った!!

ニュースの追跡

第1号 豊島の旧宣教師館

話題の発掘

『心のふるさと残して！』

住民運動とかみ合って

取り壊しの寸前に

建築学会 働きかけ

▲当館の保存決定を報じている新聞記事 (2)

1．調査方法

本記事は発行日が、1983（昭和 58）年６月４日と分かるため比較的特定が簡単です（日付が分からなければ、時期にあたりをつけて数か月分の新聞記事をすべて調べる必要があるため）。そこで、以下の手順で該当の新聞記事を探します。

①該当しそうな新聞社を調べる

新聞上の「新聞」の字体と「ニュースの追跡 話題の発掘」というコーナータイトルからあたりをつけていきます。また関連した館蔵の新聞資料が何新聞かについても手掛かりとなります。

②新聞資料から新聞記事を探す

今回は国立国会図書館新聞資料室に所蔵されているマイクロフィルム資料を利用しました。

2．調査結果

①の方法の調査から『東京新聞』と『読売新聞』が候補にあがりました。特にコーナータイトルの観点から『東京新聞』の可能性が高いことも分かりました。そこで②の方法で『東京新聞』の該当日の記事を調べていくと『東京新聞』1983（昭和 58）年６月４日付け８頁に掲載されていることが分かりました！！

▲『東京新聞』の文字が確認できる

今回の成果はギャラリートークや展示の際に今後活用していく予定です。こうした調査は地味で学術的な価値は小さいかもしれません。しかし同じ新聞記事でも出典が明らかでないのと、明らかなのでは説得力が異なります。来館された方へ説明する際により確かな根拠をもとに、自信をもってご紹介出来るようになります。そして、地域の歴史の小さな疑問をひとつひとつ明らかにしていくのは学芸員としての大切な仕事であり、喜びでもあります。

当館ではこれからも皆さんとともにひとつひとつ、旧マッケーレブ邸や地域に関する研究を積み重ねていきたいなと思います。

(1) 雑司が谷旧宣教師館調査委員会編『雑司が谷旧宣教師館建物調査報告書』（豊島区教育委員会、1984）
(2)『東京新聞』1983（昭和 58）年６月４日付

（中村 岳）

ZOSHIGAYA　MISSIONARY　HOUSE　MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第７２号　　2024 年 3 月 22 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5　TEL/FAX　03−3985−4081
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

「旧宣教師館のクリスマス飾り」

―歴史ある洋館であたたかなクリスマスを―

▲食堂の２メートルを超えるクリスマスツリー

▲（上）玄関ポーチのリース
（下）ミニクリスマスツリー

今冬は、館内にクリスマスの飾りつけをおこないました！

玄関ポーチにクリスマスリース、１階食堂にクリスマスツリー、２階アンケートボックス横にはミニクリスマスツリーを設置し、期間限定で普段とはひと味違う宣教師館となりました。

特に食堂のツリーは高さ２メートル以上で、「ガラス窓から差し込む温かな日差しと、大きなツリーがマッチしていて素敵」という嬉しいお声も…！また日が沈むのが早い冬場は、夕方になると光り輝くライトが、歴史ある洋館の中で温かく輝きます。開館時間の中でも、午前中～お昼～夕方と時間によってさまざまな雰囲気のツリーが楽しめるのは、私たちにとっても意外な発見、収穫でした。

来年度も敬虔な宣教師であったマッケーレブの想いを受け継ぐ当館の雰囲気を大切にしながら、ご来館の皆さまにより楽しんでいただけるよう、さまざまな取り組みをしていきます。

クリスマス飾りは次の冬も飾る予定です。ぜひ、温かな雰囲気の洋館の中でクリスマス気分を味わっていただければと思います～☆

（中村 岳）

としまと『赤い鳥』

― 旧宣教師館はじめての企画展を振り返る２―

『赤い鳥』と作家たち

2022（令和４）年、豊島区が区制 90 周年を迎えるにあたって当館で開催された、企画展「としまと『赤い鳥』～区制 90 年を彩る児童文化～」。「雑司が谷旧宣教師館だより」71 号では、企画の主旨や展示構成を紹介しつつ、展示で取り上げた各テーマ「豊島区と『赤い鳥』」、「『赤い鳥』の影響」、そして作家の鈴木三重吉と坪田譲治について説明しました。今回は、展示で取り上げた５人のうち、深澤省三、北原白秋、そして芥川龍之介について触れます。

▲第 22 巻第３号の「竜宮の使」に関しては、サイズが一回り大きいため、別の場所に鑑賞スペースを設けました。

『赤い鳥』の表紙がずらりと並び、目を引く壁面展示は、豊島区に居住したことがある画家・深澤省三の解説のために設けたものです。

深澤は 1918（大正７）年に東京美術学校西洋画科に入学後、『赤い鳥』の筆頭画家として活躍していた清水良雄に認められ、1920（大正９）年発行の４巻５号で初めて挿絵を提供しました。1927（昭和２）年の 18 巻４号で初めて表紙を描いてからは、全部で 12 冊の表紙を担当しています。

今回、全ての表紙絵を展示するために、壁面展示を行うことができる特別な展示具を作成しました。一度にまとめて見ることで、季節に合わせた内容で描かれていることや、描いているものが人物であったり動物であったり、バリエーションが豊かで見る物を楽しませる表紙であることが伝わります。

上質な児童雑誌を制作することを掲げた『赤い鳥』では、子どもの美的感覚を育てる美しい童画も必要不可欠だったことが伺える展示です。

▲展示具の設置作業中の様子。

さて、『赤い鳥』の柱と言えば、童話と童謡、童画である、といわれます。今回の展示ではその点に言及できるよう、童画家として深澤を、そして『赤い鳥』の童謡を象徴する人物として、詩人の北原白秋を取り上げました。

▲左から、芥川、深澤、白秋の展示風景。当館で所蔵していた書籍のほか、豊島区立郷土資料館など豊島区が所蔵する書籍も展示されました。

創刊から『赤い鳥』の主力であった白秋は、のちに山田耕筰が作曲する「からたちの花」などを含む多くの詩を発表します。自らの人生における『赤い鳥』の位置づけについて、『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号で「赤い鳥は三重吉後半生の象徴そのものであったと同時に、不肖ながら白秋此の私の分身の映像でもあった」と回想しました。

最後に、作家・芥川龍之介について紹介します。鈴木三重吉や坪田譲治は童話作家として有名ですが、芥川はそうではありません。芥川の『赤い鳥』への参加は、三重吉からの依頼によるものでした。芥川は創刊号のために「蜘蛛の糸」を執筆し、以後、「杜子春」を含む４作品を寄稿しています。芥川の死後、それまでに執筆した童話の中から６作品を集めた童話集『三つの宝』が刊行されましたが、挿絵を担当した小穴隆一によると、３年前からこの童話集を企画していたようです。小説家として有名な芥川の違った一面を紹介する展示となりました。

交流する『赤い鳥』の作家たち

さて、展示では、５人の作家と掲載作品の解説を行うだけでなく、彼らの関係性にも言及しました。これらのエピソードは、本人の述懐によるものもあれば、その子供により語られた話もあります。

例えば、三重吉の娘・すずが『深沢省三・童画の世界七十年展』（多摩美術大学美術参考資料館編、1988 年）に寄せた文章によると、一時期（1920 年～ 1924 年頃）、『赤い鳥』の関係者が「赤い鳥野球チーム」として活動していたようです。深澤は、すずとの対談にて「赤い鳥社といえば、どこのグラウンドも貸してくれ、一高のグラウンドでもよく練習したものです。僕はピッチャーをやり、またどのポジションにもつき、鈴木淳さんはファーストでした。高崎にも遠征しましたし、先生も試合の時は必ず一緒にこられました。」と語っています。鈴木淳は、『赤い鳥』の童画を担当していた画家であり、清水良雄、深澤とともに『赤い鳥』の表紙・挿絵の担い手でした。文中の「先生」は三重吉のことです。『赤い鳥』の主幹と画家という普段の関係性から離れて野球を通して交流を深めていたことは、非常に興味深いエピソードです。

▲『赤い鳥』の担い手たち」として、５人の作家たちの交友関係や年表を展示。

旧宣教師館初めての企画展示の紹介はいよいよ次号（73 号）で終わります。73 号では、当館１階の『赤い鳥』コーナーで放映された小森香子先生の朗読映像と、小森先生と坪田の関係について取り上げる予定です。

（小山 勝美）